

SKIP シティ国際 D シネマ映画祭 2021

～国際コンペ受賞作品を鑑賞する～

中山 秀一

9月25日から9日間にわたり、オンラインで開催されたSKIPシティ国際Dシネマ映画祭は、10月3日の授賞式もオンラインで行われ閉会となった。

授賞式の詳細は、本誌11月号に掲載されているとおりで、授賞作品の監督コメントなども、もれなく掲載されている。

ここで受賞した作品、とくに海外の作品は、映画祭が終わってから、日本国内で公開されることは殆どない。

そこで筆者は、授賞作品の何本かを選んで、読者の皆さんに詳しく紹介報告するのが、例年の習わしとなっている。

封切前の作品紹介は、観に行く必要がなくなっても困るので、詳しくやらないというのが、暗黙の了解だ。しかしSKIPの海外作品はその心配がないので、私も作品にたっぴりと感情移入して、読者と共にいるつもりで鑑賞する。

今回は、海外授賞作品の4本、『ルッツ』、『ライバル』、『シネマ・オブ・スリープ』、『ミトラ』である。

《筆者が観た受賞作品の感想》

☆最優秀作品賞（グランプリ）

①『ルッツ』アレックス・カミレリ監督（マルタ）



この作品は、シチリア島の南120kmほどの、地中海に浮かぶマルタ島（マルタ共和国）の漁港が舞台だ。

マルタは、地中海のほぼ中央という、優れた立地から、歴史的にも列強民族からの統治が繰り返されており、フランスナポレオンによる侵略も受けているそうだ。都市部の建築物は歴史の厚みを感じさせる。

この作品では、漁港の位置は明かされていないが、作品の中で、海鮮市場から遠くに見える街並みを考えると小都市にある漁

港のようだ。

通常の映画祭なら、上映が終わったところで、来日の監督と観客とのQ&Aがあり、ロケ地の話とか、マルタ共和国の話などを聞いたのに、と残念だ。

さてこの物語は、それほど大きくない漁港で、親しい漁師仲間との会話で進行する、一種の人間模様だ。

会話は短いフレーズの積み重ねで、理屈をこねるような会話は無い。単発的に必要な言葉を投げ合って会話が進むのだが、全体に軽快なテンポを感じさせる。

主人公の漁師ジェスマークは、生まれて間もない赤子のことが気になっている。病院で「成長障害」という病名を告げられたからだ。

彼は赤子のことをいつも気に掛けながら、沖合で網を巻き上げているが、小魚しか網に掛かっていない。とれた数匹の小魚を船底の冷蔵庫に入れて、ついでに船底の床蓋を開けてみたら、かなりの水漏れを発見、船の修理が必要となった。

赤子の治療費が掛かる家計のことを考えると、何とか打開策を考えなければ思うようになる。

タイトルの『ルッツ』とは、彼の舟の名前だ。この赤と黄色とブルーの帯に塗り分けたデザインは一見派手だが、いかにも地中海という明るい色模様だ。因みに、他の舟も同じような模様をしている。

彼の舟は、祖父の時代から代々愛用しているもので、先頭部の内側には、彼が赤子時代の足形が付いている。そこで、その横に、生まれたばかりの赤子の足あとも付けることにした。そして、船の修理もした。

不漁が続いているが、高価で売れるメカジキは、禁漁期となっていて、捕れても海に戻さなければならない。しかし、その禁漁期のメカジキを、市場のボスが絡んで密売をしているという腐敗話を聞いて、彼は漁師をやめることを決心したようだ。

お金をかけて修理したルッツを、トレーラーに乗せて買取屋に持って行き、7000ユーロを手にした。そしてその金で、冷凍庫つきのワゴン車を買った。

魚を捕る側から、売る側に転換したのだ。その変わり身の早さは見事なものだ。幸いなことに、赤子の「成長障害」という疑いは、晴れたようだ。

☆主役のジェスマークは、マルタで働く実際の漁師が演じている。審査委員長で俳優でもある竹中直人氏は、この主役ジェスマークを評して、無表情でありながら、それが演技になっている！と絶賛している。

このアレックス・カミレリ監督は「私は、人生と映画について、多くの偉大な日本の監督たちから学びました」と述べている。日本人にとっては嬉しいことだ。

☆監督賞

②『ライバル』マークス・レンツ監督（ドイツ、ウクライナ）



亡くなった父親への思慕が強い少年が、魅力的な母親に近づく金持ちの肥満男を、驚くべき知恵と経験で、手を下さずに亡きものにしてしまう。

物語は、ウクライナ人の母親（未亡人）が、ドイツの金持ち男の家庭に住み込み、身体が悪い奥さんの看護師として働くが、その奥さんは5か月前に死亡した。しかし、奥さん亡きあとも、その金持ち男は引き続き少年の母親を雇って働いている。

既に妻を亡くしたやもめ男と看護師。しかも看護師として働く母親は不法労働という、緊迫する国境問題も絡む。気になるのは、この男は肥満で重度の糖尿病のため、普段でも薬を手放せないということだ。

この作品は、父を亡くしている少年にとって、母が新しい男とねんごろになるのが耐えられず、結果としては、その肥満男を見殺しにしてしまう、という映画だ。タイトルの『ライバル』とは、母を奪おうとするその肥満男は、少年にとって「ライバル」だという意味に解釈した。

少年は、ウクライナの田舎で祖母と暮らしていたが、祖母が亡くなり、教会で葬儀が行われる。少年は、棺に横たわる祖母の顔を繁々と覗き込み、手をさわってお別れをした。

葬儀が終わると、少年は親族の計らいで、密行を斡旋する業者のワゴン車に、荷物の中に紛れて乗り込み、ドイツにいる母のもとに向けて出発した。

途中、何力所かの検問を無事通過して、ドイツに入ると、荷物の隙間から覗いている少年も、繁栄しているドイツを感じたに違いない。所定の場所に着くと、母が迎えにきて、狂気のように再会を喜び合う。

少年は、母が住み込んでいる肥満男の家に、居候をすることになる。そしてあるとき、肥満男と母がセックスに戯れているのを見してしまう。

ところがそのうち、母は体調を悪くして男が病院に担ぎ込むが、不法滞在のため、まともな手続きでは診てもらえない。そこで、病院の玄関前に彼女が一人で倒れ込み、見るに見かねて病院の看護師が、院内に運んで診てくれたという、ウルトラCを使った。病名は盲腸炎と判明、治療はしてもらえることに。

肥満男は、母が退院するまで、少年と共に林の中にある別荘に出かけて滞在する。そこで男は、ライフル銃の撃ち方など物騒な趣味も少年に伝授して、少年は大喜び、だいぶ少年も心を開いたようだ。

そこで、男は切り出した。私は君の母さんと結婚する。そうすれば、母さんもドイツに正式滞在できるようになる。

男が、母の様子を見るため街に出かけて、別荘には少年一人、キッチンまわりの戸棚を、興味本位に開けていたら、ブドウ糖の錠剤がまとめて保管してある。少年は、その錠剤を取り出してなめてみたら甘くておいしい。あの男にとっては、命を救う補糖剤だ。

男が街から戻ってきた。母が、木金土日月の週5日、別荘に戻ってくるとの土産話に、少年は有頂天で男と大はしゃぎ。これから楽しい生活が始まりそうだ。

男は重度の糖尿病で、インシュリンのコントロールが悪いと、低血糖症になって危険だ。男は常時ブドウ糖の錠剤を持ち歩き、低血糖症になった時には、その錠剤を呑んでいるのを、少年は以前から見ている。

母が来るのを楽しみに、はしゃぎ過ぎたのか、男が重度の低血糖症で倒れてしまった。男はいにくブドウ糖を持っていなかった。少年はキッチン戸棚にあるブドウ糖を取ってほしいと頼む。

少年は、錠剤の在りかを知らないふりして、傍観している。男はついに息絶えてしまった。

すると、少年は外の林に行き、土を段ボールに入れて持ち帰り、その土を男の顔にかけてやる。そして段ボールを顔に被せて小さな十字架を差し、少年独自の流儀で葬儀を行う。

少年はライフル銃を持って表の林を歩き回り、キノコ取りのオジサンの前で、雄叫びをあげると、そのオジさんも大声で返してくれるのだった。

☆観応えのある映画だ。少年の演技がすばらしい。少年は、ウクライナの田舎にいる頃、草原で遊んだ。そのとき、小鳥が死んでいるのを見て、素手で地面に穴を掘り、その小鳥を埋葬してやるシーンがある。

☆審査員特別賞—1 (今回は2作品が受賞)

③『シネマ・オブ・スリープ』

ジェフリー・セント・ジュールズ監督 (カナダ)



この作品の公式解説には「作中そこかしこに張り巡らされた伏線は、初見では気が付かないものも多く、是非本作は二度ご覧いただきたい。」とある。伏線に加えてさらに構成自体もひねっており、筆者などは、三度でも理解できなかったが、大変おもしろい映画だ。

ストーリーは、ナイジェリア出身の黒人男アンソニーが、いずれ家族を呼び寄せてアメリカに住みたいと、移民の申請中である。そしてとりあえず今住んでいるのは、ほぼ砂漠に近い平原に突如と建っているモーターだ。映画の大半は、このモーターでの滞在中、数日間の出来事である。

タイトルに『シネマ・オブ・スリープ』とあるごとく、ドラマのスタートは、ある映画館の観客とスクリーンで始まる。映画

館のスクリーンは、ワイドではなく昔風の4:3で、しかもモノクロ映像である。

モーターのベッドで、アンソニーが何かにかくなされて目が覚めると、その手には血が流れている。ふと横を見ると、同じベッドに寝ている女性が血を浴びて死んでいる。(このシーンはモノクロ映像となっているので、血の色はどぎつくない)

まか不思議なことに、このモーターでのシーンが先ほどの映画館で上映されており、中央の上席には、正装したアンソニーが座り、自身のスクリーン映像を見ているのだ。何故自分が起こした事件が、映画となって上映されているのか不気味だ。

この時、スクリーン両脇のドアが開くと、2人の刑事が乗りこんできて、アンソニーの両腕をつかんで連行する。アンソニーが観客に助けを求めても、観客は皆眠りこんでいる、という不気味なシーンだ。

モーターの部屋・早朝シーン、ここからはカラー映像になる。目覚めたアンソニーがふと横に寝ていた女に触ると、なんと、つめたくなっている。あわててアンソニーは彼女をベッドの下に押し込んで隠す。夢と思っていた事が現実になったのだ。

そこへ刑事2人が訪ねてきて、写真を見せながら、この女を知らないかと詰め寄る。見るとその写真は、たった今ベッドの下に隠した女だ。アンソニーは、見たことがないとしらを切る。

刑事は、アンソニーをしばらく泳がすことにしたようだ、2人は部屋を出て行く。

なんとこの映画は、ここまでがオープニングで、ここからメインタイトルが始まる。それが大変しゃれているのだ。刑事が去って、ぼっとしているアンソニーが、ふとテレビに眼を遣ると、その画面にはチャップリンの映画『移民』が放映されている。

タイトルは、そのチャップリン映画の画面にスーパーして、映画の進行に合わせてタイトルも進行する。因みに、メインタイトルは、海上に行く移民船のフルショットにスーパーインポーズされている。

しかもメインタイトル「CINEMA OF SLEEP」の文字が、痛んだフィルム画面の縦ブレのごとく上下に踊っている。しかも、その文字のブレは原画像とは異なる周期のブレなので、故意にブレを付けているのが分る。この監督は相当な映画マニアに違いない。

タイトルが終わり、シーンは先ほどのモーテルに戻る。朝、アンソニーが身支度をしていると、ドアのノックと共に、若い女が黒の下着だけで飛び込んでくる。あれ！待てよ、あの女は、タイトル前のシーンでは死んでベッドの下に隠されたはずだ。すると、映画は時間を相当に巻き戻された感じだ。

その女は、夫から暴力を受け、逃げてきたのでもう戻りたくないという。彼女の名前はアプリヘットで、エリトリア出身だと名乗る。

アンソニーが用意した朝食を共に食べるなど、2日目あたりから、女は打ち解けて、いろいろと話をするようになる。たまたま映画の話題になる。すると彼女は結構映画の話題にもものってくる。

◇ アンソニー「昔のアメリカ映画が好きなんだ、いつか映画史の教授になりたい」

○ 女「アメリカでナイジェリアの映画を撮る？」

◇ アンソニー「ハリウッドね…」「ぼくはハンフリーボガードに夢中だった、ボギーを知らない？ カサブランカだ！ 難民を描いた最高傑作、欧州の難民をね」

○ 女「カサブランカ！ それぞれ、アフリカが舞台なのに、アフリカ人が出てこない」

◇ アンソニー「難民を描いた最高傑作だ、欧州からの難民だ」

女も、かなりの映画通だ、このような会話で、女の心はアンソニーに引き寄せられていく。

この映画の終盤では、船室のような病院で、重症患者の病室に横たわるアンソニーと女アプリヘット。不思議なことに、そこには健康者のアンソニーと彼の妻が見守っている。アンソニーは別の世界から現れたのだろうか。医師は患者の回復は望めないと告げる。

モーテルの入り口には、タクシーが待っている。正装して入口に立つアンソニーの横に、女・アプリヘットが真白な結婚衣装？を着て現れ、晴れがましい2ショットになる。二人を乗せたタクシーは、平原を真っ直ぐに伸びる道路を走っている。映像は、それを真上からの空撮でフォローしているが、やがて走るタクシーが消えてなくなり、道路だけが残っている。二人の行く先は夢の世界か、象徴的な終末だ。

☆監督のシネマへのこだわりは大変なものだ。

アンソニーの部屋に押し入った刑事も、思わず映画談議に引き込まれるシーンがある。筆者も映画マニアなので、楽しませてもらった。

これは、かなり難解な作品であることは確かだ。その謎解きのような構成、観賞後、一緒に観た仲間と飲みながら、監督が投げた仕掛けなどを語り合うのも映画鑑賞の醍醐味だ。

☆審査員特別賞—2

④『ミトラ』カーウェ・モディーリ監督 (オランダ、ドイツ、デンマーク)



この映画の主人公ハーレ・ダネンは、イスラム革命のとき、娘ミトラが逮捕され、その後処刑された。母親ハーレは数年間祖国イランで過ごし、その後オランダに移住した。以来学者として成功、講演活動などを行っている。

ハーレの兄モフセンは、当時、現地の秘密警察に捕まり、7年間の獄中生活を経験している。その後は、妹ハーレの執念でもある、娘を売った裏切り者探しに協力している。

40年前、ホメイニ氏がフランスから戻ったイラン革命時、娘のミトラは若気の至りで、「この腐った国が私の祖国よ！」と言って祖国イランに残った。その後、娘は革命軍に捉えられて投獄された。

映画の冒頭で、母親のハーレは、刑務所からの電話で、娘ミトラは昨日の朝、刑が執行されたので、私物を引き取りに来るよう知らされた。

母親のハーレは、仲間の裏切り者が、娘ミトラを売ったのだと信じている。ハーレは、その裏切り者の名前も知っているし、兄も、ちらっと見ただけだが、顔は思い出せるという。

ハーレが娘の処刑を知らされてから、すでに37年も経っているが、ハーレはその裏切り者をようやく探し出し、接触することができた。裏切り者の女性は、「サレ」という名を名乗っており、オランダに来て長くないのか、言葉が不自由なのを利用して、

買い物の手助けなどをしながら信頼関係を築く。

高級のシャンプーがあるからと、ハーレの自宅に呼んで、彼女の黒髪を洗髪してやったり、裏切り女の家を訪ねたりする。裏切り女には、人懐こい小学生の娘「ニル」が居ることも分った。

あるとき、裏切り女に、本当の名前は「レイラ」だろうと問い詰めると、私の名前は「サレ！」、レイラなどという女ではない、と強く反発否定する。

ハーレは、娘ニルを旅行に誘うと、外出に飢えているのか、簡単にその気になる。遠くない別の町に住む兄モフセンの家を訪ねることにした。途中の車内で、ハーレは、娘に、いい大学に入れてあげる、将来は良い仕事ができるように、教育を受けさせてあげる、などと娘に好意を超える愛情を打ち明ける。

兄の家に着き、その話をしたら、普段はおとなしい兄が、血相を変えて、そんなことをしたら、りっぱな誘拐犯になる！すぐに娘の家に送り届けろ、と大いに心配。レイラは、すぐに娘の家に帰り、裏切り者の母親のもとに娘を戻した。

インテリである筈のハーレは、多分、自分の娘ミトラを忘れられず、母性本能で、敵である裏切り女の娘に思わず愛情を注いだのではないだろうか。あるいは、裏切り女の娘を亡きものにしようと思ったのか。

娘を家に送り届けた帰途の外階段を、一段また一段と降りるハーレは、もの思いにふけて立ち止まる。ここで映画は暗転、エンドタイトルになる。

☆この映画は、イスラム革命に絡むストーリーなので、中東問題に詳しくない筆者には、難しい部分もあるが、素晴らしい作品だ。「政治サスペンス」とも言われるが、同時に「人間ドラマ」だと思う。

当初は、イラン時代と、現在の映像が交互にカットバックで現れるのに振り回された。イラン時代はハーレと兄が共に髪の色が黒く、現在のゴマ塩髪とは別人のようで、戸惑ってしまったのだ。

それにしても、イスラム文化とは、難しいことだ。ごく最近もアフガン問題があり、収まる気配がない。勉強をしなければと思った次第だ。

Syuichi Nakayama
日本映画テレビ技術協会名誉会員